

日本女子スポーツ界におけるセクシャリティの現状と未来

－大学女子サッカー日米比較調査と日本人アスリートへの

聞き取り調査より－

須永 未来 (山梨大学)

1. 目的

本研究は、日本とアメリカの女子スポーツ選手の性的マイノリティーに関する現状傾向を把握した上で日本の問題点を指摘する。そしてその問題点の解決のための道筋を日本人性的マイノリティーとの会話から導き出す事を目的とする。

2. 研究方法

調査 1: 比較検討を行うため量的調査を採用した。対象母集団は、須永(2017)の調査を基に大学生年代を対象とした。しかし調査条件の限界から完全代表地とならない事を前提としてアメリカと日本において実施した。よって調査 1 は調査 2 に実施する調査の先行研究とした。

1) 対象者

アメリカにおいては南西部にある A 大学及び B 大学の女子サッカー選手を中心とした女子スポーツ選手 56 名 (サッカー 42 名, バレーボール, バスケットボール, 硬式テニス, ソフトボール, ボーリング, チアリーディング各 1 名) を対象とした (有効回答数: 48, 回収率: 85. 7%)。日本においては大学女子サッカー選手 125 名を対象 (有効回答数: 49, 回収率 39. 2%) とした。

2) 調査方法

アメリカにおいて直接回収法にて質問紙調査を実施した。日本においてインターネットを用いた web 質問紙調査を実施した。

調査 2 : 日本の性的マイノリティー女子スポーツ選手との対話から彼らが感じている日本の現状を拾い上げる。

1) 調査協力者

日本の性的マイノリティー女子スポーツ選手 (含元スポーツ選手) 3 名。

2) 調査方法

web 会議サービスである zoom (5. 0. 1) を用いた半構造化インタビュー調査を行った。

3. 結果と考察

調査 1 : LGBTQ に対し日本では、認知されつつあるもアメリカと比較すると認知度は低いことが分かった。また日本ではセクシャリティに関し誤認している人・意味はわからない人もいたが、アメリカではいなかった。しかし日本女子サッカー界に独自に存在するセクシャリティ「メンズ」に対しては、日本ではアメリカより良いと思っている人が多く、より彼らに対し寛容であることが分かった。

調査 2 : 協力者らはアメリカと比較すると遅れていると感じており、日本の環境は偏見がある前提で考えていることが分かった。また「メンズ」という存在に助けられ生きやすい環境となり自身を表現することができていることが分かった。

4. 結論

本研究では、日本の女子サッカー界で通用している「メンズ」という考え方を女子スポーツ界に広める事を提案する。しかし女子スポーツ界のみの通用ではなく日本全体に浸透することで性的マイノリティー (性的少数者) の居心地の悪さは解消され社会状況は安定すると考える。

5. 主な参考文献

1) 須永未来 (2017) 日本の女子サッカー界における独自のセクシャリティについて. 山梨大学教育人間科学部平成 28 年度卒業論文.